

暴くものであった。それに対して作中二度引用される「ゲラサの豚群」（マルコ五・1—20）という福音書の逸話は、墓場で暴れ悪霊に憑かれた男がイエスを眼にするや否や「いと高き神の子」と呼びかけ、一挙に悪霊を祓われて本来の自己を取り戻すというものである。かようなドストエフスキイと福音書の対照から、反権力・反宗教という「我意」の暴発に自壊していく近代ロシアが、如何にして「いと高き神の子イエス」と出逢い、その悪を拭い去ることが出来るのか、というドストエフスキイの問いがみえてくる。

聖書の中のこの逸話を解釈するには、いちど聖書学などの分野で進められている精緻な研究に基づく必要がある。そもそも「ゲラサの豚群」はいわゆる共観福音書に収められた「治癒物語群」のひとつであり、病や罪意識や敵意など何等かの「悪」に陥る人びとがイエスの超越的な権能に触れて次々と癒されていくエピソードが描かれている。そしてイエスによって癒されたひととは自らの信仰によって苦難や閉塞状況から解放されること（マルコ五・34）、そしてその癒しは他ならぬ神への信仰を通してのものであること（マルコ五・19）、しかもそのイエスが磔殺に及んで「神支配」の可能性が問い直されること（マルコ五・34）などが語られ、改めてイエスの伝道の意味とその実現可能性が語られる、と考えられる。もちろんこの分析は一例にすぎないとしても、「ドストエフスキイとイエス（福音書）」という問題軸から思想を見出そうとするならば、文献学的かつ社会史的な方法論で福音書のテーマを読み解くといった思想史的作業は必要であり、更にはドストエフスキイを通

して聖書理解の新たな可能性すら見出し得ると思われる。

改めて近代日本思想の立場をみると、『ドストエフスキイの哲学』討議に参加した西谷啓治や和辻哲郎などは「東西宗教思想の再構築」という如き問題にまで話を進めようと考えている。その関心は現代においてもなお重要であるが、そこに跳び出す前に、テクストの思想的分析がどこまでなし得るのかを検討せねばならない。とりわけ聖書研究や禅語録研究といった文献の思想史研究が大きく進歩している今、思想を分析する際には、その典拠たる宗教テクストを文献学的にデータ整理し、時代・文化毎に異なるテクスト受容の在り方を明らかにする思想史的方法が求められる。

近代における仏教者のキリスト教観

—— 島地黙雷・大等を中心に ——

岩田 真美

本報告では、浄土真宗本願寺派僧侶の島地黙雷（一八三八—一九一一）と島地大等（一八七五—一九二七）のキリスト教理解を手がかりに、幕末以降のキリスト教との接触が仏教にどのような影響をもたらしたのかを検討した。

明治初年の黙雷はキリスト教を「祇教」や「邪教」と呼び、その流入を「国家ノ禍害」と捉えており、そこには「護法・護国・防邪」の一体化がみられる。その後、黙雷は明治五年（一八七二）に洋行を経験する。西本願寺が黙雷らを西洋に派遣した目的は護法活動の一環としてキリスト教を調査することであった。この洋行経験を通して黙雷は西洋の「宗教」概念を知

る。そして新たに学んだ「宗教」理解を以て著したのが、教部省の政策を批判した「三条教則批判建白書」である。そこには「政教分離」や「信教の自由」の主張もみられるが、キリスト教観については洋行前と変わらないようにもみえる。一方、同時期に書かれた「教法ノ原」においては「真宗独り弥陀一仏ヲ立ツ：天主一尊ヲ立ツルニ同シ」といい、「諸宗通常ト占・祈禱ヲ許ス、真宗独り之ヲ禁シ」と述べ、真宗は日本のプロテスタントだと主張している。西洋の「宗教」概念の中核にはプロテスタンティズムの影響があるとされるが、黙雷はそこに自ら(真宗)を位置づけようと試みていたことが窺える。また西洋諸国を見聞した黙雷は、文化や生活にキリスト教が深く根付いていることに気付く。そしてそれはキリスト教が様々な形で教育に関わり、人々に布教を行っているからだと考えた。外遊先から黙雷が大洲鉄然らに宛てた手紙には「護法ノ言ヲナス勿レ、弘法ノ念ヲ以テ之ニ換ヒ」とあり、護法のための教育を行うだけでは宗門は衰退する、「護法」ではなく「布教」に力を入れなければならないと述べていた。その後の西本願寺は護法活動ではなく、普通学や語学の教育に力を入れ、僧侶の海外留学を支援し、やがて海外伝道にも乗り出すようになる。これらは西洋で見聞したキリスト教に影響を受けたものと考えられる。

また明治中期以降の黙雷にとって大きな転機となるのが、明治十一年(一八九八)息子の雷夢(一八七九—一九一五)がキリスト教に入信したことである。島地黙雷の息子のキリスト教入信は新聞のニュースとなり、世間を騒がせた。このとき黙雷が雷夢に宛てて書いた手紙は、後に「仏耶両教の根本義」と題

されて『新佛教』第四巻四号(一九〇三年)に掲載されている。黙雷は盛岡の願教寺を雷夢に継がせる予定であったが、この一件によって大等(旧姓は姫宮)を島地家の養子として迎えることとなった。一方、雷夢は入信後も仏教とキリスト教との狭間で悩み、大正四年(一九一五)三十六歳の若さで病没した。翌大正五年(一九一六)島地大等は『警世』(第二四—二四八号)誌上に「仏耶両教の根本的相異点」を発表し、仏教とキリスト教の比較を行った。大等は両教の救済観について、キリスト教は救済説をとるが、仏教は解脱説をとるといい、浄土教が救済主義的に理解されがちであるが、キリスト教が解脱主義の意味を少しも認めないのに対して、「浄土門の仏教は、先ず一般仏教の根本義たる解脱主義を出発点として、それより進んで救済主義を建設している」ことに注意すべきだと指摘している。他にも「因果説」「世界観」「人間観」「罪惡観」「如来と神」「終末観」などの項目に分けて両教の相異点を詳細に検討している。大等が両教の違いを強調する背景には、前年に亡くなった雷夢の存在があったと考えられる。

従来、護法思想は近代仏教の形成を妨げたといわれてきたが、そもそも黙雷の洋行も護法活動の一環としてキリスト教を調査することにあつた。しかし、そこでキリスト教という「他者」を知ったことは「自己」(仏教)に対する認識をも転回させることになった。その「自他認識」の転回過程こそが、近代仏教の形成と深く関わっているのではなからうか。